

方向

第一二七号 一九九一年三月一五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

民話と山姥 (下) 1991.2.25 原田 慶

山姥の話のなかでも少し異様な感じのするものに、これもよく知られた話がある。稲田和子氏再話の「くわすにようぼう」である。

むかし、うんとよくばりなおとこがひとりですんでいたそうだ。

おとこはやまへしごとにいって、

「おらにもようぼうがほしいなあ。よっくはたらいで、めしをくわないにようぼうがほしいもんだ」といったそうだ。

このように話は始まる。それをどこかで聞いていたらしい山姥が、美しい娘になって、男のところへやってくる。女房になった山姥は、たしかに飯は食わない。それなのに米が減る。ある日、出かける振りをして、男が天井に隠れてみると、女房は、倉の米俵を出して来て、大釜で炊くと、それをみんな握り飯にした。

ながいかみのけをほどこいたら、あたまのてっぺんからおおきなくちが、ざくつとでたんだと。にようぼうは、にぎりめしをつかんで、ぼいっぼいっぼいっぼいっ、おてだまみたになげあげた。

隠れてみていた男はびっくりして、女房を追い出そうとする。

「おらはやっばり、ひとりぐらしがいちばんいいから、おまえはでていってくれ」といったところが、うつくしいにようほうは、たちまちでっかいおにばばになって、

「みたなこのやろう。おまえもくってやる」

というがはいか、おとこのくびをつかんで、ふろおけのなかへほうりこんだ。そうして、おけを、ぐいとあたまにのせると、やまにむかって、のっしのっしとあるいていった。

男は大変な恐怖を味わうことになるが、山姥にも苦手なものがあった。まずショウブの葉が刃となって山姥を刺し、ヨモギの汁が、魔除けの力を持っていて、山姥を溶かしてしまう。男は助かったのである。五月の節句にショウブを飾ることや、ヨモギの薬効などのいわれを語る話だとされるが、欲張りな男のことを考えると、山姥が気のどくにもなる。子ども達はこの話を聞いて、どう思うのだろうか。まだ子どもの方に近いわが家の娘にたずねてみると、保育園時代にこの話を読んだ時は、食われそうな男の身になって、はらはらし、どうして逃げればよいかを考えるのに忙しくて、男と山姥と、どちらがよいかなどは、考えなかったという。ただ、どちらも好きでなかったことは確かだと言った。言われてみればもっともなことだ、この山姥の大力や、のっしのっしと歩いて行ったなどというところに、痛快を感じたりするのは、意地の悪い見方なのかもしれない。しかし、昔から、家の主である父親のたいいは、女房子どもに「食わしてやっている」と常に言ってきた。

吉田敦彦氏のお話では、山姥伝説の中に、頭の上に大きな口があるというものは多く、それは、古代の人の、物を貯蔵するのに使った大きな壺を意味しているということである。それにしても、この「くわずにようほう」

は何か意味ありげで、哀しい話である。

このように山姥は、植物の薬効やまじない祈禱などというものに弱いようで、「三枚のお札」の話でも、寺の小僧を追いかけて、和尚さんの祈禱したお札に邪魔をされ、小僧に逃げられたばかりか、山姥は和尚さんの知恵に負けて、逆に豆になって食べられてしまう。その山姥が和尚さんの腹の中で、一寸法師のようにあばれないかと思うけれど、大抵の話で、山姥はあっけなく死んでしまうのである。しかし、山姥の民話には、もちろん、このように怖い話ばかりではない。たとえば松谷みよ子氏の「やまんばのにしき」

ちようふく山のとっぺんに住んでいる山姥が、ある年の秋、子どもを生んだ。その夜、ふもとの村の家々の屋根を、どろどろと踏みならして叫ぶ声が出た。

「ちようふくやまのやまんばが、こどもうんだで、もちついてこう。ついてこねば、人もうまもみなくいころすどお」

村の人達は食い殺されてはたまらない。米を集めて餅を搗き、あかさばんばという婆さんが、山姥のところへ届けに行った。

「ごめんください、ふもとのむらから、もちもってきました」

.....

「ようきた、ようきた。ゆんべこの子を生んでな。もちがくいたくなったもので、この子をつかいにだしたが、むらの人たちに、めいわくかけなかったかとあんじていたところだ」

「ひや、このあかんぼうがゆうべ、つかいにきたので……」

「やまんぼの子だもの。うまれればすぐとんであるくだ。して、もちはどうした」

こんな調子で、やがてあかんぼうが熊をつかまえてきて、熊のすまし汁をつくり、餅を入れて、あかざばんばも御馳走になる。そして婆さんは村へ帰ろうと思うが、山姥に、二十一日ほど手伝ってくれと頼まれて、毎日怖い思いをしながら働き、二十一日がすぎた。

「うちでもしんばいしてるべから、かえりたいども」

「そうか、やっかいかけたな。おらもげんきになったから、うちへもどってくる。なんのれいもできんが、しぎを一びきもっていけ……このにしきはな、なんぼつかってもつぎの日はもどおりになっているふしぎなにしきだ。むらの人たちにはなんにもねえども、だれもかせひとつひかねえように、おらのほうできをつけてるで」

と言って山姥は、婆さんを村まで送り届けてくれた。山姥が神の子を生むということや機を織るといふこと、山姥の芋つくねを拾うことがあるなどの伝説が感じられる話である。

このように、山姥は、土地の守護神としての性格を持っていたのに、だんだん怖いものになっていったのは何故だろうか。もう一つ新作童話、浜野卓也氏の「やまんばおゆき」

おゆきはやさしい素直な娘で、十八で、二人の子持ちの弥五の後添いになった。弥五の母親のおくまばあさんの言うことをよく聞き、コギノ織りというフジ蔓の織維を使った織り物も村一番の織り手になった。この村には六十歳になるとロベらしのために西国巡礼の旅に出るといふしきたりがあった。おゆきも六十歳を迎えた正月に、旅立つことを村役から言い渡されたが、何でも「はい」とにこにこ聞いてきたおゆきが、この時ばかりは返事をしない。世話をかけた息子達もさすがにおゆきの旅立ちには悲しくて、鼻をこすっている。おゆきは言う。

「なあ小六よ……おれは、いままで、ひとにいいつけられてなんでもすなおに『はい』とふたつ返事できただ」

「そうとも、ずいぶん、みんなは、おぼばにむりをいっただ。もうしわけないこったあ」

……
「いいや、おれはそうはおもわねえど……。みんながおれにたのんだり、やらせべえと思ったことは、みんなわけのあることぞい。だで、おらはいつでも『はいはい』ときいてきたぞ。……けんど」

「けんど、なんだ」

「おれは、まだ手足じょうぶで、仕事もできる。村のためにもはたらけるのに、なんで、村を出ていかにゃなんねえだ。そこのとこがよくわかんねえ。……」

次の朝、突然おゆきの姿が村から消えた。村人の入ることを禁じられている罰山ばちやまに入って山姥やまおばになったらしい。それからは時々、若い嫁さんが、機織りが下手で困っていると、山姥がきて手伝ってくれた。

この話は新作であるが、作者が、天竜川の上流の村の伝説をもとに、全国に伝わる古いしきたりなどを思いめぐらして書かれたものと、後書きにある。おゆきのように村のおきてを納得できなかった人はあったと考えるのが自然である。それでも仕方なくほとんどの人は従った。村を出た人は旅のうちに行き倒れるか、姥捨ての罰山に入って、その姿を、ふと里人に見られた時、山姥として恐れられたのかもしれない。このような話が語り継がれるうちに、語る人の思いが、話をだんだん、怖いものにふくらませていったとも考えられる。また、出産前後の女性が、信仰の上から山中に入ることが多く、坂田金時などのように、山姥伝説のもとになったとも言われる。先の手紙にあったように、松本明美さんの山姥像も、山に住む風変わりな老婆、異種の人と感じており、人間としている。

「山姥とはどういうものかと思っているの」と娘にたずねてみたら、「鬼子母神さん。山に住んで、人や赤ん坊を食べるから」と答えた。鬼子母神は、仏によって救われ、人々の守護神となったが、山姥はどのように救い取られたのだろうか。

昨年の六月に河村能舞台で「山姥」を見て、もう一度、この二月に観世会館へ「山姥」を見に行った。白頭の山姥は洗われたように枯淡で、美しさは一輪の蓮のようでもあった。白髪を後ろで束ね、覆いかぶさるような髪の下に、すべてを見透かしているような、静かな鬼女の面があった。その姿の奥に感じられる高い精神は、わたし達が求め続けて、死を目前にした時、もしかしたら至り着くことができるかもしれないもののような気がした。

この曲の内容は、山姥の曲舞を得意とする「百ま山姥」と呼ばれる遊女が、善光寺詣での途中、越後の上路（越前）の

山道で、急に日が暮れて困っているところに、山姥である女が現れて、宿を貸そうと言う。そして遊女は山姥の曲舞を所望されて驚くのであるが、これが山姥の意図するところで、わざと日を暮れさせたのであった。夜が更けて月光のもとに山姥がほんとうの姿を現して、深山の光景や山姥の境涯を語り舞い、その後、どこへともなく消えて行くというものである。山姥のことを描くところを読むと、

闇まぎれよりあらはれ出づる姿詞は人なれども髪には荊棘せきごころの雪を戴き、眼の光は星の如し、さて面の色はさにぬりの……

そもそも山姥は生処も知らず宿もなし、ただ雲水を便にて到らぬ山の奥もなし、然れば人間にあらずとて隔つる雲の身を変へ仮に自性を変化して一念化生の鬼女となつて……

とある。何年かまえに、さんかの生活を映画にしたものを見た。さんかというのは、無籍者で、定住することなく、山間や水辺に漂泊した人々の代表的なもの。セブリという、簡単な小屋や天幕を建てて、あちこちへ移動しながら生活する。竹細工で箆や箕などを作り、農家へ行って穀類や野菜と換えてもらっていたが、農家の人々は恐ろしいものを見るような顔で、大急ぎで品物を交換して、さんかを追い払っていた。さんかのなかにも色々な人があって、農家の畑を荒らしたり、盗みや殺しをする人もあったから、さんかとみればすべて同じように憎まれていたようだった。

映画は、さんかの生活の側から描かれていたので、観る方には、さんかを恐れ、人とも思わない農家の人達の方を異様に感じたが、どちら側に立つかによって、見方が反対になる。

能の「山姥」でも、山姥とは如何なるものと思うかとの質問に、遊女の従者は、山に住む鬼女だと、答えている。同じ人間でもその生活の方法や考え方の違いによって、多数が少数を排撃する。少数の方は鬼ともされる。だから誰もが多数の仲間に住ようとし、集団の中において安心するのだろう。山姥は生処も知らず宿もなし、人間にあらずとて隔てられて鬼女となった。映画の中で、さんかの若い娘と村の者が心を通わせるようなことがあって、互いの間にあやしい雲行きが生じていた。何だったかははっきりとは思いつけぬが、きっかけがあって、村の人達が総勢で鎌や鋤を持って、谷川を山へ追い登り、さんかの誰かを叩き殺す場面があった。激情がおさまると村の人達はまた何かに異常な恐ろしさを感じていた。仕返しを恐れていたのか、自分達のしたことに対する恐怖だったのか、人間はいつも目に見えないものに怯えているようである。

このように山に住む者と里の者との間で、互いに自分達の生活を守るための確執が深まり、山を越えようとする里人にとっては、山の生活者に襲われるのではないかという恐れが、山姥の話にもなったかもしれない。

世を空蟬の唐衣払はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれうちずさむ人の絶間にも、千声万声の砧に声のして、打つはただ山姥が業なれや、都に掃りて世語にせさせ給へと思ふはなほも妄執か。ただうち捨てよ何事も、よし足引きの山姥が山めぐりするぞ苦しき……

この妄執が、謡曲「山姥」のテーマだと言われる。

廻り廻りて輪廻を離れぬ妄執の、雲の塵積って山姥となれる鬼女が有様、みるやみるやと峰に翔り谷に響きて、今までここにありと見えしが山又山にやまめぐり、山又山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

山姥とは、繰り返し、繰り返しても絶ちきることのできない心の迷い、心の闇が、積もって成った姿だと言う。そう言い残して山姥は、峰に翔り、谷に響き、オ、オ、オ、オ……とくだけ散るこだまのように消えてしまった。

もとは土地を守る神であり、その神を抱き守りする小母であったおおらかな山姥が、妖怪変化、異界のものとなり、妄執の積ったもの、人の心の世界として救いとられてみると、山姥とは、自分の外にあるものだろうかという気がしてくる。

今年の節分の頃、雪まじりの冷たい雨が降ったりやんだりしていた。わたしが買物に行こうとして外へ出ると、すぐ目の前を、静かに通り過ぎて行くものに出あって、思わず立ち止まった。うす汚れた、黄色い毛布、赤い毛布、白い布を順に重ねて頭から足許まですっぽりとかぶり、音もなく進んで行くもの。足だけが見えて、ほこりと油にまみれて黒く光っている。ゴムのぞうりを履いていた。丁字路に突き当たって、しばらく迷った末に、右手、五番町の方へ動いていった。あまりの姿に、通りかかった人はだれも息を飲むように見送り、一言も声を出さずに足早に立ち去った。山姥のことを考えていた時だけに、わたしは一層はっとした。

山の奥深くまで機械が入り、すべての闇を無くしてしまいそうな今、山姥は居場所を失って、時には都会の雑踏にまぎれて、無言のままアスファルトの上を通り過ぎているのではないだろうか。能の中の研ぎ澄まされたような山姥の姿に、迷いや怖れ、あらゆる欲望を捨て去ったもともと強靱な精神を見る。排斥されることによって、そこで生きなければならなかった者が、すべてを有るがままに受け入れながら、逃げず、正面から立ち向かうまでの心の曲折を思う時、わたしにも少しは勇気が湧いてくるような気持ちさえるのである。

第二回

嗚呼どうしよう今日は往かなければならないお祖父様が貸すといッた机を夕べ裏のお婆さんか取りに来た時お祖父様は妾の英学の事を岡野様に頼んでみてと伝言なすッたら昼過ぎならば何時でも家に居ればお出なされとの心よき早速の返事お祖父様はお前の注文通り先生が出来てよかろうとおッしゃつた而も今朝お出かけの折もひるから往けとの言葉往かずは叱り給はん思ひきッて往かんかどうも往きにくいと愚図々々為し居る中時計は三時を報しぬ

「お祖父様はどこへ倭文ちやん独り」

と夏休の中に少しく勉強したき事有りとして毎日朝より晩まで外出がちの俊次が今日は珍しき早帰り

「あら兄様何時の間にお帰りなすッたのさぞ熱かったでせう」

俊次は早くも靴下ぬぎながら

「熱いのなんのってほんとに焼け死にそうだ倭文ちやん五升一升のお願ひだから一寸僕の手拭を取っておくれな」

「五升一升なんてそんな事はないでも取ッてあげてよ」

手拭を渡したまま柱に倚りかゝって漠然倭文子は庭を眺め居る

「倭文ちやんどうかしたの何だかいやに考へ込んで居るじやないかお祖父様に何か呵られたのだらう」

「否そうじやありません岡野さんの所へいくのがあの……」

「おやムムそれか嬉しくってご心配の種」

「嬉しいのじやないのよいやなんですよ」

兄の言葉を真面目に受けての云解可愛らし俊次は汗じみたま洋服をぬきながら

「別に今日に限らないだろうがお祖父様がそうおっしゃったのなら早くいっておひでな」

「なんて云つて往つたらいゝのでせう独りじや何だか……」

「独りでいやなら僕が一所にいつてあげやうか」

「兄さんと……女の人ならいゝのに」

「おや又失敗た男じゃご意に召しませんかアハムム」

戯談いゝながら漸く俊次は衣物を着かへ一寸柱の時計を見て

「倭文ちゃんもう直に四時だそんないやなら今日はよして明日お秋さんにでも一所に往ておもらいな」

この一言にて倭文子は重荷を卸した様な心地お秋さんに一所に往つて貰へば何の恥かしき事はなし馬鹿な時つぶしをしたと眩きぬ

二人夕飯を喫し終りし頃玄石は帰り来ぬお帰り遊ばせと丁寧な手をつく倭文子を見るや否や玄石は

「どうした岡野さんの所へいったか」

「あの参る積りでしたけれどつひ……」

「つひゆかなかったのかあれ程にいつて置たのに」

稍々彼の調子は変れり玄石は人並みはづれて孫を可愛かりしが兎角短く自分の命令を聞かぬ折は忽ち唇を鏝はせて怒るに倭文子は之が何よりも怖きなりあはれ玄石がこの一言に倭文子は早や涙ぐみてさし俯くを玄石はじろりと見て

「やあ氣まりが悪いのやあ独りじやいやだどうだこうだのとそんな事ばかりいっていちやとても立派な人にはなれぬ」

秘蔵の娘が忘れ片身如何にしてか自分ひとりの手で立派な者に早く育て草葉の影の娘を喜ばしたきと思ふ熱心の其丈叱り方も酷き成可し其れより倭文子が最早過ぎ去った過までひきつり出しての長説教されど彼女はよく祖父の心を汲み分け居れば始終はいふと溫柔く聞き居る殊勝さ俊次は見兼ねて側よりとやかくと取り為しつくらふれば漸く玄石が機げんも直りぬ元より憎みて云ひし事ならねば忽ち顔色もやはらぎ慈愛籠れる声して

「喃倭文や解ったかもう泣くには及ばぬお前はいつまでも子供の様じやの」
その折藤井君はお内ですかと突然庭先にて声す

「居ります誰です」

と俊次は倉皇てゝ立ちいで

「やあ岡野君かさあ上り給へ」

岡野と聞ひて倭文子の胸は早鐘をうつが如く

「お祖父様妾は母屋へいって遊んで参りますよ」

と玄石の返事も待たで急ぎ母屋へ行く折お秋を初め叔父も叔母も十三になるお秋の妹も夕飯をすまし端近く出でて何か楽しげに談話の最中倭文子の来れるをお秋は見て

「倭文子さん貴嬢も縁日へいらつしやいませんかお母さんも妹も参りますから」

此の楽しげの談話は多分縁日行の相談なりし成可しざる所は好まぬ倭文子なれど若し茲に居らば玄石の呼ぶ事もやあらん幸なれば一所に行きて帰る頃は彼の人も最早居らざるべしと思ひ玄石への断はお秋よりいひてやがて一同打連れ縁日へ行きぬ

第三回

手水鉢に倉皇と飛び込む蛙を珍らしげに眺め居る倭文子「お秋さんはどうなすったかしらんと独りごつ折からお秋は弛みかゝりし帯上を引きしめなから入り来り

「倭文子さんお待ち遠様さあ参りませう」

「貴嬢もういゝのそんなら気の毒ですか一寸行つて頂戴ね」

庭からが近ければとてお秋は先にいで立つ後より倭文子は

「五升ですからお秋さん気まりの悪くない様にして頂戴よ」

「大丈夫よそんなに心配なさらなくてもよくつてよ」

木戸を明けて一寸右に横りたる所に広からねど小奇麗なる格子造の家ありお秋は此処に止まり何事か倭文子に

「よござんすか這入ますよ」

倭文子は今更少しく返事に躊躇せる間にお秋は早や格子を明け

「お婆さん今日は」

倭文子も今は詮方なく黙して後に従へり昼飯の後かたづけして居たお婆は禪をはづしながら

「おやいらつしやいお珍らしい倭文子様も御一所で」

「あの倭文子さんが英学を教へて戴きに上ったのですかお婆さん岡野様はお内ですか」
極めて小さき声にてお秋は聞きぬ

「え、お内でございますよそう申して参りませう」

やがて彼女はいで来りこなたへと二人を奥に案内す岡野には数回口きし事あるお秋も斯く真面目になりては有
緊羞かしく何の口上もいはず挨拶すれば倭文子は猶更の事お秋の後に同し事して控へたり岡野は読みかけ
し本を片辺に置き之もいと無愛想に然れど丁寧に頭を下げつゝ一寸二人を見しのみにて後は目のやり所に余程困
れる様子なりお秋は倭文子の頼めるはこゝの事ぞと思ひ一寸岡野を見て又倭文子を見返り

「倭文子さんお願い申しては如何です」

倭文子はそうねえと口の中にて云ひながらもぢゝなし居るを岡野は氣の毒に思ひ

「さあこちらへ何のご本ですか」

机の端に手をかけて待つに倭文子も止を得ず座を進め

「そんならどうかお願ひ申ます」

蚊の如き声して本を差出すに岡野はそれを手にとり

「はあバースのヒストレーですかそれでどこがお辨りになりませんか」

之にて我役目はすみたる事とお秋は静かに会釈して立つ頼みに思ひしお秋に立たれて倭文子はいよゝゝ羞かしく何処にても早く聞きて帰りたい順序もかまわず手当次第四所ばかりきよて

「まことに有難うございます」

と最早尋ぬる所なきを示せり

岡野は至て沈着なる人にて思慮深く学問も品行も共に学校にては評判よく風采といひ容貌といひ実に立派なる有為多望の青年なり年は二十一歳なれど二つ程あけて見ゆる所又価値あり今此の岡野と只二人一室に對せる倭文子が感情果たして如何清淨無垢天女の如き彼女の心は羞さに一時も早く辞し去らんと思ふばかりの外何の心もなし彼女は無礼なる業とは知れど礼も充分えいほでそこゝに帰りぬ

此夜岡野は倭次の許を訪ひ来ぬ彼は倭次と何か六ヶ敷事を熱心に論じ折々は玄石とも話せり然れど読書に余念なき倭文子には昼の無礼を謝せしのみにて一言も物言はざりき斯くて二時間半も彼は遊びて帰る折

「倭文子さん又質問があつたらいつでも遠慮なくお出なさい」
宛もいひ憎そうに倉皇たる様の可笑しき

循其後倭文子は玄石に折々促がざれしが種々といひ紛らして岡野の許に行かざりき岡野も何故か其後一度も訪は

ず而のみならず朝な夕な聞えし読書の声は聞えずなりぬ

※ ※ ※ ※ ※

三伏の夏もいつしか去り庭の追水に涼風立ち初め倭文子が学校の休もはや残り僅かと成にけり偶然かの裏のお婆は音れ

「どうも長々お机を有難とうございました岡野さんが上る筈でございませうが何か急に学校の方にご用が出来たとかおつしやいまして今朝早くお帰りになつたもんですから：：而してこの本は岡野さんが貴嬢にあげてとおつしやいました」

之にて彼女が用ははや終れるに今日は玄石も俊次も留守にて気の置ける人なきを見て尚言葉をつゞけ

「まあねえ貴嬢岡野さんは可笑しいじやございませんか此本をご自分で持っておいでなすたらと申しましたら僕は行きにくいから帰った後で持っていくとおつしやいますのですよオホ：：あゝ見えましてもねっからお坊様でございますよ随分面白事をおつしやっては人を笑はせてばかり居りますのそれですのに貴嬢ねえどうなすつたのかいつか貴嬢の所へ上ってからはいやに考えこんでばかりいらつしやつてちつとも他へおでになりませんでしたよほんとにお若い方はね：：」

と意味ありげに笑ふ

無邪気なる倭文子に何の意味や分らず只聞きもせぬ事をよくも長々と饒舌る人よと思ひしのみ彼女が帰りし後かの本を見れば湖上の美人といふ英書なり中を開けば二三枚の所に西洋紙の片に何か英字もて書けるあり倭文子は

何心なくそを読めば
愛する嬢よ

一昨日散歩の折本屋にて之を見しまゝ買ひ求めたれば貴嬢に参らするなりこの本と共に我を終世も忘れ給ひぞ

君が友なる岡野

上は『誰が罪』執筆前後の春夢女史
下は一八九一年女子学院卒業時の女史（右から二人目）



師教洋西と生業卒回一第院學子女



歌人・大塚五朗

(一八)

1919 原田憲雄

崔承喜

一九三七年(つづき) 五朗、四十歳。

『水鏡』昭和十二年五月号。

燃ゆる火のたとへば白き牡丹火のさびしきに似て踊る崔承喜 (庭二六)

わが前に踊るは女体と思ふ時あやうく心みだれんとする

時折に

何かしら抑へ難き心ありて出でて来し二月の街空にアドバルーン浮けり

しみじみと櫂の若芽のにはふなどといふべき年頃(ころ)と娘(こ)はなりにしか

春近し

春来ると思ふはたのし夕光(ゆふかげ)のこもりてにほふ庭の青樹に (庭二六)

裏敷に日がさしてゐて鶯のささえしきを今朝聞きにけり

街空

春もやや季節定まる夕空に航空標識燈まはるしづけく (庭二六)

身を愛へをしむ心切なり街を来て航空標識燈しばし仰ぎぬ (〃)

洛北に遊ぶ、同行森田曠平

春浅くいまだ谷地田(やちだ)の鋤(す)かれねば土ごもりつつ昼を鳴く藁(ひき) (庭三・洛北松ヶ崎六首)

風の中に日は澄みとほる寒けさや野づらのはてに仰ぐ比叡山 (//)

いつまでも児の泣き声は(泣くこゑの)聞えあつ夕光(ゆふかけ)ややに冷ゆる村道 (// 四)

風の中に一筋白き田圃道(たんぼみち)鉄砲打ちが行きて小さし (//)

犬連れて鉄砲打が(の)行きしかば田中の道の風は明るし (//)

六月号の切り抜きがない。『日蝕の庭』一七頁の次の三首はあるはこのころのものか。

開け放つ部屋にあふるる風ありて昼寝の耳に通う音あり

顔にさす日かげもたのし山の道にたちどまりては仰ぐ山桜の花

花咲きてほのけき庭の山吹にあかとき雨は降りの細(こま)かさ

七月号。

風とみに出でて日和(ひより)の崩るるか庭に吹かれて散る山桜

寂しさをたのしむ年配(とし)とわがなりぬ山の桜の吹き散るを見る

疲れたる神経の前に散りいそぐ桜の花は紙片の如し

法隆寺に遊ぶ

春すでに夏とおぼしき空のはれ大寺の上に鶯舞ひ遊ぶ

こらへ来し尿（いばり）をすると道のべに立ちてむかひぬ生駒の山に
（庭四望・大和龍田にて）

寺々をめぐりていささか疲れたり埃だらけの靴をわが拭く
昼深くまぶしき風の吹きて居り疲れたる目に仰ぐ寺の屋根

中宮寺

尼寺と聞きて来へこししかどうら若き男の僧の吾を案内へあないす

ふくよかに頬杖つけるみ仏を青葉の風はなまめきて吹く

度々を来てみればこのみ仏の顔も馴染の女（をみな）にも似る

龍安寺塔頭大珠院にて石井先生の追悼歌会を開く

曇り日の曇りはふかく池の面にこれはまた夥しあめんぼう飛ぶ
（庭一七）

席上初めて山崎敏雄先生に逢ふ

雨の中を傘さしかけて行きし時心緊へしまりて言葉なかりき

※前号正誤 第一二五号 一六頁 四行と五行の間に次の一行を追加する。

夕暮の空いつまでも明りゐて泉石（しま）にほのけき山桜の花
（庭三七）

第一二六号 二頁 七行は間違つてはいないが、印刷の不鮮明な冊があったようなので、左に再録する。

開通に間もなき電車通すがしがし遠見の比叡朝ばれの空に
へなお「遠見」の読み方は「とほみ」

同号 三頁 三行 「さるとりばら」は「さるとりいばら」の誤りではないかとの質問があったが、原文通り。

3-39

しかし、見識があり、多く学び、記憶がよく、教養たかく、知識を持ち、

最高の無上道に旅立った人たちに、あなたは聞かせなさい、この眞実を。(137)

幾千万多数の仏を見た人たち、無量の善を植えた人たち、

誓願堅固な人たちに、あなたは聞かせなさい、この眞実を。(138)

つねに精進し、慈悲の心をもち、その慈悲をこの世でながく実行し、

そのため体も命もなげすてる、そんな人たちの前でこの經を説きなさい。(139)

たがいに理解し、尊敬し、愚かな連中をば支持することなく、

山の洞窟で満足する人たちに、聞かせなさい、讃えられるべきこの經典を。(140)

よい友らとは交わって、悪い連中は避ける人たち、

そのような仏の子らに会うならば、この經典を開示しなさい。(141)

戒に過失なく、マニ宝珠のようで、広大な經典を受持している人たち、

そのような仏の子らを見るならば、かれらの前で、この經典を語りなさい。(142)

怒らず、つねに正直で、すべての命あるものに同情を持ち、

スガタを尊敬する、このような人たちの前で、この經典を語りなさい。(143)

会衆のなかで法を説き、抵抗を受けず、注意深く、

幾千万億多数の実例をあげる、そのような人たちに、この經典を説きなさい。(144)

ぬかづいて合掌し、一切知者のありかたを研究し、

四方八方に遍歴して、よく法を説く比丘を探し求める者、(145)

広大な經典を受持し、他のことをたしなむことなく、

他の偈は一句もたもない、そんな人たちに、あなたはこの優れた經典を説きなさい。(146)

如来の遺骨は受持できよう、探し求める人があるならば、

そのように、この經典を求めて得、頂礼し、受持する者に。(147)

他教の經典を心にかけて、ローカーヤタや、諸派の論書、

愚かな境地に似合った連中を避けて、あなたは説き明かすのだ。(148)

一カルパが満ちるまで、わたしは幾千万億の構造について語るだろう、

最高の無上道に旅立った人たちに、シャーリプトラよ、かれらの前でこの經典を説きなさい。(149)

以上が、聖なる「妙法蓮華」という法門の譬喩品第三。

ye tū iha vyakta bahu-śrutās ca smṛtīmanṭu (W: smṛtīmanṭu) ye paṇḍita jñānavantah /
ye prasthita uttamam agra-bodhip tan śrāvayes tvam paramārtham etat ॥137॥
dṛṣṭiś ca yehi bahu-buddha-kotyaḥ kuśalam ca yai ropitam aprameyam /

adhiyāsāyās ca drdha yesa ca (W:co) syāt tān śrāvayes tvam paramārtham etāt // 138//
 ye vīryavantah sada maitra-cittā bhāventi maitrīm iha dīrgha-rātram /
 ulsṛṣṭa-kāyā talha-jīvite ca teṣām idam sūtra bhaneḥ samīksam // 139//
 anyonya-sampkalpa sagauravās ca yeṣām (W:teṣām) ca bālehi na sampstao 'sti /
 ye cāpi tuṣṭā giri-kandaresu tān śrāvayes tvam ida sūtra bhadrakam // 140//
 kalyāna-mitrāṃś ca niceyamāṇāḥ pāpāṃś ca mitrān परिवार्येयान्ताḥ /
 yān īdrśān paśyasi buddha-putrāṃś teṣām idam sūtra prakāśayesi // 141//
 acchidra-śīlā maṇi-ratna-sādrśā vaipulīya-sūtrāṇa parigrāhe sthitāḥ /
 paśyesi yān īdrśā-buddha-putrāṃś teṣāgrataḥ sūtram idam vadesi // 142//
 akrodhanaṇ ye sada ārjavās ca kṛpā-samanvāgata sarva-prāṇiṣu /
 sagauravā ye sugatasya antike teṣāgrataḥ sūtram idam vadesi // 143//
 yo dharmu bhāse pariśāya madhye esaṅga-prāpto vadi yukta-mānasah /
 drṣṭānta-kotī-nayutair anekais tasyeda sūtram upadarśayesi // 144//
 mūrdhnā ṅjalīm yaś ca karoti badhvā sarvaṅga-bhāvaṃ parimārgamāṇah/
 diśo (W:daśo) daśa (W:diśo) yo 'pi ca caṅkrameta subhāṣitam bhikṣu gavesamāṇah // 145//
 vaipulīya-sūtrāṇi ca dhārayeta na cāsya tucyanti kadā-cid anye /

ekam pi gātham na ca dhāraya 'nyalah tam śrāvāyos tvam vara-sūtram etat ||146||
tathāgatasya (W:tathāgatasyo) yatha dhātu dhārayet ta 'haiva yo mārgati ko-ci tam darśa-
emeva yo mārgati sūtram idrām labhiva ca (W:co) mūrdhani dhārayeta ||147||
anyesu sūtresu na kadā (W:ka)-ci cīnta lok āyatair anyatarais ca śāstrair /
bāhāna etādīśa bhonti śucarās tāms tvam vivarjiva prakāśayer idam ||148||
pūrṇam pi kalpam ahu śāriputra vadeyam akāra-sahasra-katīyaḥ /
ye prasthitā uttamam agra-bodhim tesāgralah sūtram idam vadesi ||149||
ity ārya-saddharmapūṇḍarīke dharmā-paryāya aupamyā-parivarto nāma tṛtīyah ||

真実を真実として受入れる素直な人に『法華經』を説け、というのが要約であろう。その真実が何か、という問題がともない、この問題をめぐりさまざまな考え方が展開する。釈尊の時代に、バラモン教のほかに六人の思想家が有名で、仏教側から「六師外道」といった。その一人のプラーナ・カッサパは、よい行為に対してよい結果があるとはかぎりず道徳は無意味だとした。マッカリ・ゴーサラは、すべては偶然で因も縁もないとした。アジタ・ケーサカンバリンは、地・水・火・風の四元素だけが実在だとする唯物論で世間知と現世の快楽を重んじた。ローカーヤタ（順世外道）はこの一派をさす。バグダ・カッチャーヤナは、アジタ説を變形した。サンジャヤ・ベーラッティプッタは不可知論。ニガンタ・ナータプッタは、苦行によって心身の束縛から離れ、覺りを開こうとするもので、ジャイナ教ともいう。いずれも自説を確信し、釈尊の教えに耳を傾けようとしなかった。